

オーシャン島の日本海軍

—太平洋戦争の知られざる一断面—

西野 照太郎

本誌前号（昭和六一年四月、第三〇号）で、中島洋氏は「ナウル、オーシャンの日本海軍」という短文の中で、連合軍の上陸を見ずに終戦を迎えた両島について、日本には両島での戦史が全く空白となっている点を指摘し、とくにオーシャン島において日本軍の占領下に起ったことを、早い機会に調べておくべきだ、と強く要望している。

その要望にこたえるための手掛りとなる資料として、私は十年ほど前にオーストラリアの古書店から入手した一冊の本によって、太平洋戦争中のオーシャン島について、原文の抄訳を中心に情報を提供しておきたいと思う。

それはサー・アルバート・エリス著『中部太平洋の前哨点』Sir Albert Ellis, "Mid-Pacific Outposts" (Auckland, Brown and Stewart Ltd., 1946) という本で、サー・アルバート・エリスがナウル島、オーシ

ン島、ギルバート・アンド・エリス諸島を、一九四五年九月から十月にかけて、重大な使命を帯びて歴訪した紀行文であるが、歴史的な資料としても価値の高いものといえる。

サー・アルバート・エリス（一八六九—一九五二）は、一八九九年にグアノ採掘、コプラと真珠の貿易を行っていた「太平洋諸島会社」Pacific Islands Co., Ltd. のシドニー営業所に地質学者として赴任してきた。そこで営業所のドアが風であおられないために、玄関に置かれていた一塊の岩石に心をもちた。それは同社のコプラ運搬船がナウル島の海岸で拾って、記念に持って来た石であった。

その岩石が高品位のリン鉱石であったことを、地質学者アルバート・エリスは認定した。それを契機に翌年ナウルとオーシャン島を訪れた彼は、この両島に良質なリン鉱石が大量に埋蔵さ

れているのを発見した。その辺の経緯については拙著『新・南方見聞録（朝日イブニング・ニュース社、昭和五四年）の第三話「グアノとリン鉱石」を讀んでいただきたい。

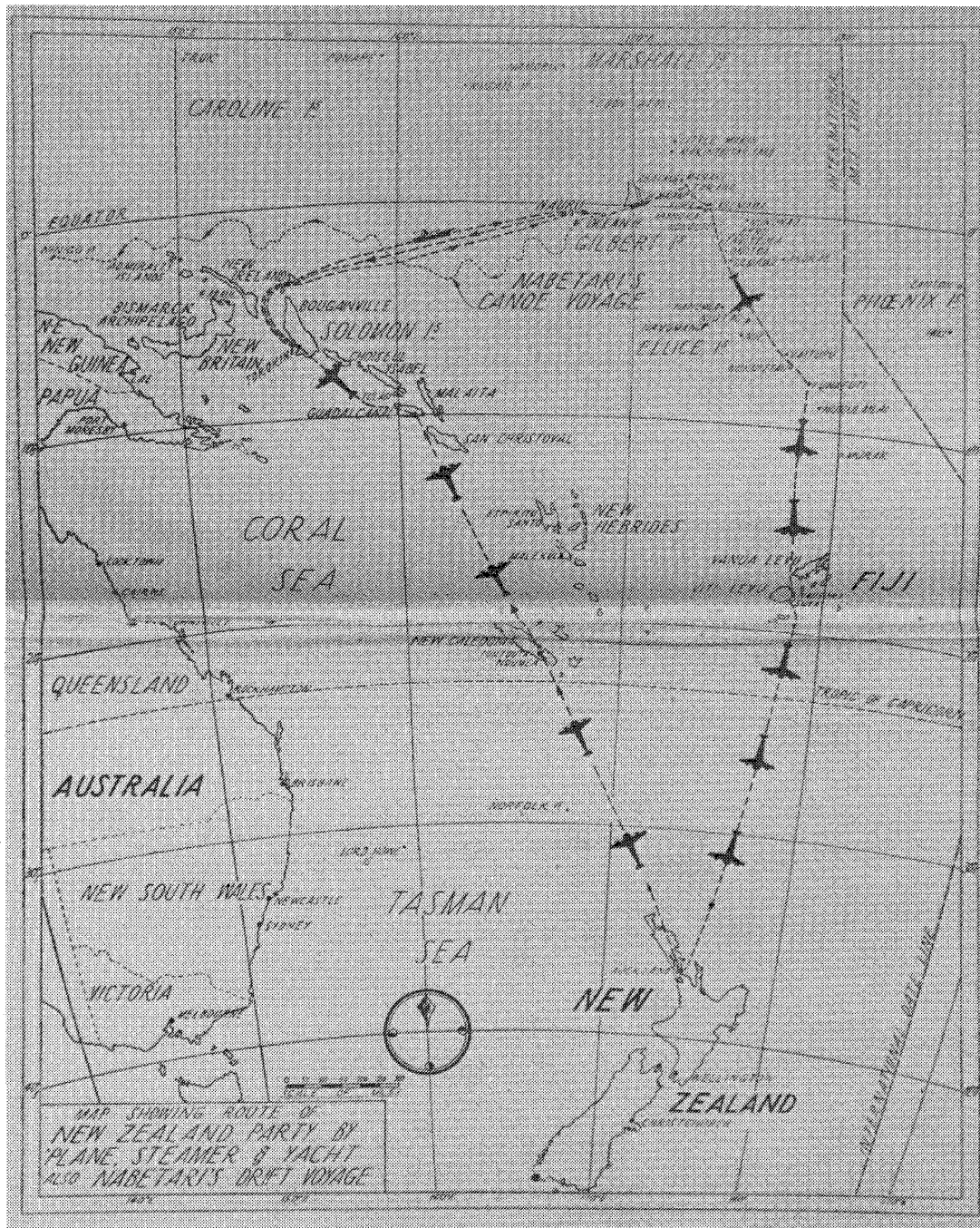
太平洋諸島会社は一九〇二年「太平洋リン鉱業会社」Pacific Phosphate Company に改組され、同社は一九一九年にイギリス、オーストラリア、ニュージーランド三国政府が構成する、「ブリテイッシュ・リン鉱業委員会」British Phosphate Commission（略してB.P.C.）に買収された。そしてアルバート・エリスはB.P.C.のニュージーランド政府委員となり、リン鉱石発見と開発の功績によってサーの称号を与えられた。

そのサー・アルバートが太平洋戦争が終って間もない八月のある日、ニュージーランドの総理府からの連絡で、政府代表として、ナウルとオーシ

ン島で行われる日本軍降伏式典に出席して欲しいといわれた。サー・アルバートは一九四五年にはすでに七十六歳の高齢に達していたが、進んでその総理府の申し出に応ずることにした。

ナウルとオーシャン島のリン鉱業の生みの親であるサー・アルバートとしては、日本軍守備隊の降伏式よりも、一九四〇年十二月のドイツ艦船によるナウル島砲撃、一九四二—四五年の戦時中における日本と連合軍双方の砲撃や爆撃によって、両島にあるB.P.C.の生産諸施設がどの程度に被害をうけているのか、自分の眼で確かめたいという調査の方に、より強い使命感をもったと考えられる。

サー・アルバートは一九四五年九月七日午前七時に、オークランド空港を出発し、途中ニューカレドニアのトンツータ空港に寄って、午後四時三〇分ガダルカナル島のヘンダーソン基地に



アルバート・エリス卿一行のルート、および、ナベタリの漂流ルート（推定）。

Mid-Pacific Outposts, Brown and Stewart Limited, Auckland, 1946 より。

到着した。翌朝七時にヘンダーソン空港を離陸し、オークランド出発後三十分間で、ブーゲンヴィル島トロキナ基地に到着した。

「リバー・バーデキン」号に乘船、四日目の朝ナウルに到着。ナウルの日本軍守備隊降伏式に出席、十四日ユニオン・ジャック掲揚などの行事の後、約二五〇〇人の日本海軍将兵を「リバー・バーデキン」号ほか一隻の軍艦に収容して、トロキナ基地に輸送。サー・アルバート

も「リバー・バーデキン」号で同行。六日間トロキナに碇泊のうえ、タラワへ先行した「デアマンティナ」号と十月一日午前七時にオーシャン島でおち合うという予定で、「リバー・バーデキン」号はオーシャン島に向かって出港した。

予定通りオーシャン島に到着し、こでも日本軍守備隊の降伏式に参加したのち、その日本軍将兵の輸送、こでもユニオン・ジャックの掲揚式、島内巡視などが行われた。サー・アルバートらは、オーシャン島からタラワへは、ギルバート・アンド・エリス諸島駐在弁務官のヨット「キアキア」号で、十月二日に出帆して行った。

その後のサー・アルバートの日程は省略するが、タラワからは航空機でフナフチ、スヴァ（フィジー）に寄り、オークランドに帰着したのは十月十三日の早朝であった。

この『中部太平洋の前哨点』は、付録をいれて三〇三頁であるが、その頁数には含まれない写真が七八葉も掲載されている。その中には日本守備隊の降伏式、日本軍将兵のナウルとオーシャン島から撤収情景など、日本にはない珍しいものも含まれている。

また付録は日本海軍守備隊の司令だった鈴木海軍少佐と、オーストラリア軍のステイブソン准将とが、署名した降伏文書 Instrument of Surrender の「ニュー」である。鈴木少佐は Lieutenant Commander NAHCOMI SUZUKI と印刷されているけれども、NAHCOMI という綴りはどう読めば良いのか、本人がこのように署名したのであるうか、読みにくい署名を印刷にするさい誤った綴りにしてしまったのか。鈴木少佐

の名を知りたいと思う。鈴木少佐と共に署名しているもう一人の日本人 SUKUMA は通訳なのであろうか。
 ≪注 その後、太平洋学会中島洋専務理事に宛てられた大槻巖氏(『ソロモン収容所』の著者。元海軍第六十七警備隊所属)の本年五月十四日付書簡に、第六十七警備隊オーシャン分遣隊の指揮官鈴木直臣少佐、前任将校佐久間弥

大尉とあることから、NAHCOMI は Nahoomi (直臣)、SUKUMA は Sa-kuma (佐久間)の誤植であろうと察せられるに至った。≫

オーシャン島の概要

サー・アルバートは次のように書いている。「オーシャン島民」に関する章

の冒頭で、「これらの原住民は屢々バナバンとして知られている。それは彼らの島が原住民の名でバナバだからであるが、バナバは多分ギルバート語で『サンゴ性岩石の陸』の意味である。」(二三三頁)

ナウルと違ってギルバート諸島を構成する一小島であったため、オーシャン島に関する具体的な情報は少なかった。



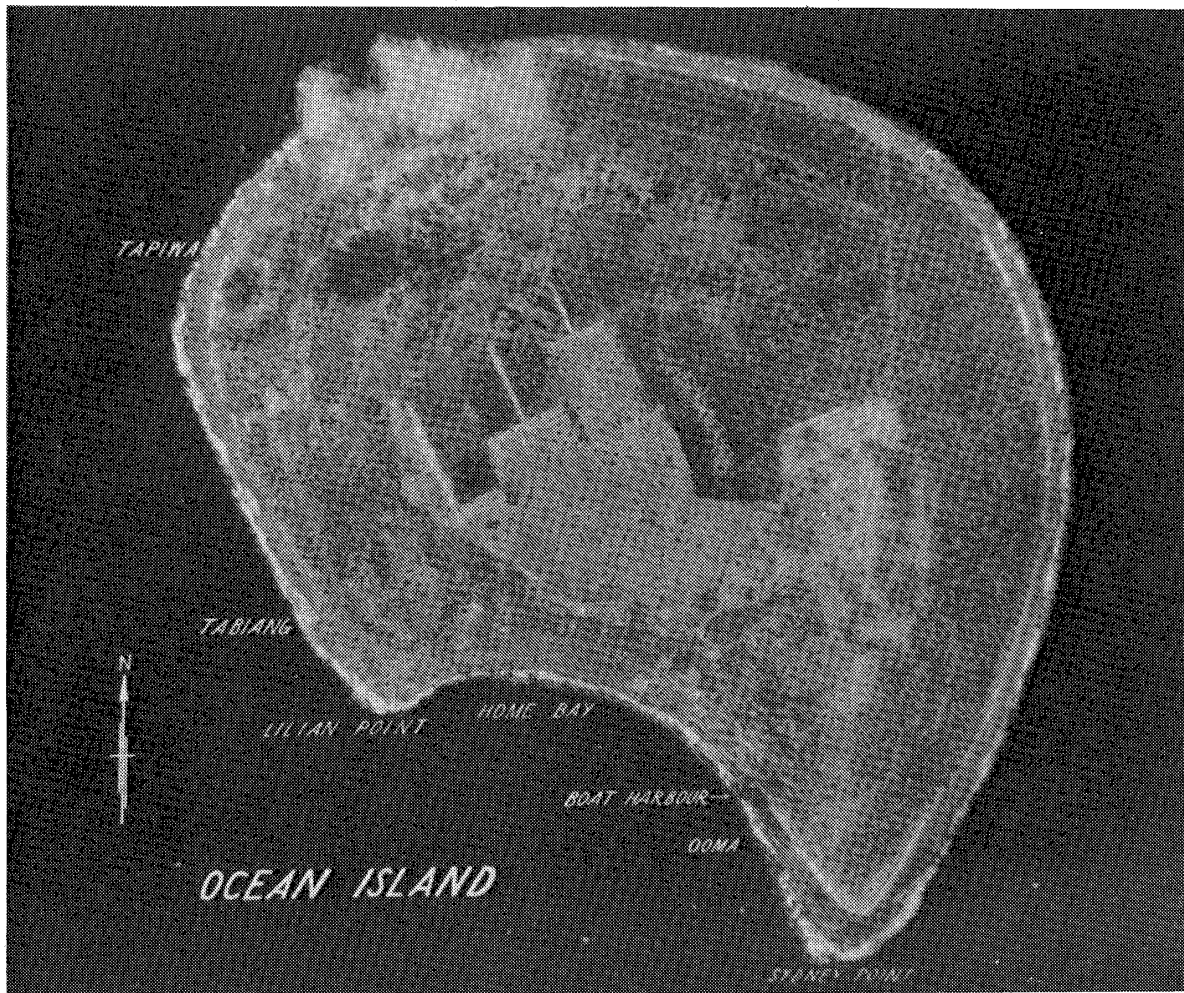
ディアマンティナ号の後甲板におけるオーシャン島守備日本軍の降伏文書調印式。左から奈良賀雄主計大尉、鈴木直臣少佐、坂田二郎大尉。

Mid-Pacific Outposts, 1946 より。

	オーシャン島 1936年	ナウル 1941年
原住民*	621	1,827
ギルバート島民**	1,156	193
ヨーロッパ人	134	68
華僑	880	1,429
合計	2,791	3,517

* オーシャン島はバナバン、ナウルはナウル人。
 ** エリス諸島民などギルバート諸島民以外の労働者を含む。

た。この島は周囲約一〇キロ、面積五・七平方キロの隆起サンゴ礁で、島の最も高い部分は標高七八メートル程度である。
 日本人にわかり易いように比較してみれば、伊豆七島の中の三宅島の面積が五五・一平方キロであるから、オーシャン島は三宅島の十分の一の面積しかないわけである。
 オーシャン島は南緯〇・三度、東経一七〇度の中部太平洋に位置する孤島で、ナウルの東方約一六五マイル、ギルバート諸島(キリバス)の西方約二四〇マイルにある。ナウルの面積は約二二平方キロ、周囲約一九キロであるから、ナウルに比べても著しく小さい島である。
 太平洋戦争直前の人口についても、ナウルのばあいはい九四一年まで発表



されていたが、オーシャン島のぼあい
は一九三六年の人口しか明らかでない。
ナウルには一九四〇年まで一九二人
のヨーロッパ人がいたが、それが一九

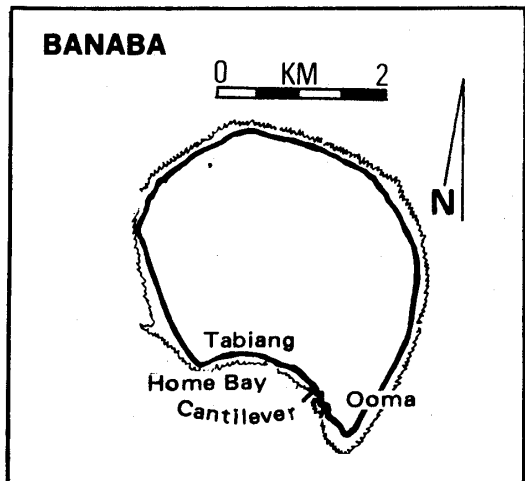
四一年には約三分の一に減少した。そ
の理由は一九四〇年十二月のドイツ艦
船の砲撃による被害で、リン鉱石の採
掘と輸出が一時停止されたこと、第二

次世界大戦によるリン鉱石輸送船舶の
不足などのため、ナウルを去ったヨー
ロッパ人が多かった点に求められる。
一九四〇年十二月のドイツの砲撃に

上はオーシャン島の空撮写真。終戦前後
頃のものと思われる。

Mid-Pacific Outposts, Brown and Ste-
wart, Auckland, 1946 より。

左はオーシャン島の図。Pacific Islands
Yearbook, 15th ed., 1984 より。



よる被害は、ナウルのリン鉱石輸量
にも明白にあらわれていた。オーシャ
ン島のリン鉱石輸量と比較する形で
次の表を掲げておく。

年	ナウル トン	オーシャン 島
1940	808,400	314,475
1941	0	255,733
1942	53,456	85,275

<資料>

Pacific Islands Year Book
& Who's who 第10版
(1968) による。

こうした状況の下で、日本が真珠湾
を攻撃した当時、ナウルとオーシャン
島の人口は何人だったのか、正確な資
料が得られないので明らかでない。

サー・アルバートは一九四二年三月
に、両島からヨーロッパ人と華僑の撤
退作戦が、実施されたときのことを説
明しているが、その撤退作戦以前に両
島を脱出したヨーロッパ人や華僑がい
たことは、サー・アルバートの次の記
述から知られる。

「BPC 職員の家や家族は、戦争
がこの段階に達する以前にオースト
ラリアに送られた。また両島におけ
る華僑の人口も、操業を続けるのに
必要な最少限度にまで減らされた」

(一八頁)

サー・アルバートによれば、一九四

二年三月の撤退作戦で、ナウルとオーシャン島から撤退したのは、ヨーロッパ人二二六人、華僑五九七人であった。そして残留したのはヨーロッパ人がナウル五人、オーシャン島六人で、華僑はナウルの一八五人だったという。

ナウルもオーシャン島も一九四二年八月に、日本海軍陸戦隊に占領されたが、ナウルについては日本軍による占領下の人口が、明らかにされている。

一九四三年 一九四四年
六月一日 五月

日本海軍 一、三八八 二、八六七

陸戦隊 七二

南洋拓殖職員 七二

日本人 一、五〇〇 一、三一一

労働者* 一、五〇〇 一、三一一

ヨーロッパ人 二

華僑 一八四 一七九

ナウル人 一、八四八

その他太平洋 一、四六三

諸島民 一九三

合計 五、一八七 五、八二〇

△資料√一九四三年の人口はナン

シー・グイグイアニ著「ナ

ウル」(一九七〇)、一九四

四年の人口はサー・アルバ

ートの著書による。

* 朝鮮人労働者を含む。

しかし、オーシャン島については日

本軍占領下の人口は、明らかに

ない。通説となっているのは、日本

軍が占領した当時のオーシャン島には、約七〇〇人のバナバンと、約八〇〇人のギルバート諸島民がいた、ということであった。しかし、後に引用するナベタリの脱出航海の章では、当時の原住民人口は二五〇〇人とされていた。その中に約七〇〇人のバナバンも含まれていたという。そうだとすればギルバート諸島民は約一八〇〇人もいたこととなる。

このサー・アルバートの得た人口関係の情報は、過大にすぎると思われるけれども、このことはオーシャン島の人口については、いかに正確な情報があったかという実情を、物語るものというべきであろう。

ハワイ大学で出版された“Kiribati, aspects of history” 1979によれば、

日本軍は真珠湾攻撃の直後にオーシャン島を爆撃したが、その当時の人口は

原住民(バナバン)約六〇〇人、ギル

バート・エリス諸島民約八〇〇人、華

僑約二〇〇人、ヨーロッパ人一〇〇人

としている。

一九四二年三月の撤退作戦で、華僑

の全部とヨーロッパ人の大部分が撤退

したのであるから、オーシャン島に残

留したのはバナバン約六〇〇人、ギル

バート・エリス諸島民約八〇〇人、それ

にヨーロッパ人六人ということになる。

合計約一四〇〇人が日本海軍陸戦隊が

上陸した当時の人口と推定される。

一九四三年中に日本軍はオーシャン

島の人口を、食料不足になることを配

慮して、島外に送り出すという措置を

とったが、何回に分けて何人が送り出

されたのかについても、サー・アルバートは明確にしていない。たとえば、一九四三年に「約八〇〇人のオーシャン島民が、ナウルに連れてこられた」(一九頁)と書いているが、これは

他の部分で約七〇〇人のバナバンとしているのと比べて差異が目立つ。

オーシャン島に住んでいたギルバート・エリス諸島民も、一九四三年中に

三回に分けて、コストラエ、ポナペ、タ

ラワなどに送り出されたことは確かであ

ったが、どこに何人が送られていたのか正確な人数は明らかでない。

それでは送り出しが終わった後、日本

軍がオーシャン島に残したギルバート

・エリス諸島民は何人だったのか。

サー・アルバートはその人数を二〇〇

人ないし一六〇人と記している。他の

多くの資料は日本軍が残して酷使した

ギルバート・エリス諸島民を、一六〇

人あるいは二〇〇人としている。い

ずれにしてもサー・アルバートのいう

ように、日本軍が上陸した当時のオー

シャン島の人口(バナバンとギルバート・エリス諸島民)が、二五〇〇人弱

であったとすれば、日本軍が送り出した人数は二三〇〇人ないし二四〇〇人

ということになり、ナウル、タラワ、

日本軍のオーシャン島防衛体制

太平洋戦争開始にさいして、日本軍はオーシャン島についての程度の情報を

もっていたのであろうか。

明治三十八年(一九〇五年)から明治

四十二年(一九〇九年)までの間に、数

百人の日本人が年期契約労働者として

オーシャン島で太平洋リン鉱業会社に

雇用されていた。当時日本ではオーシ

ャン島のことを「大洋島」とよんでいたが、外務省関係の資料にも、その島の

地理的特質などについて解説したものがあ

った。したがって、開戦当時の日本政府も

オーシャン島について、かなり正確な情報をもっていたと考えられる。

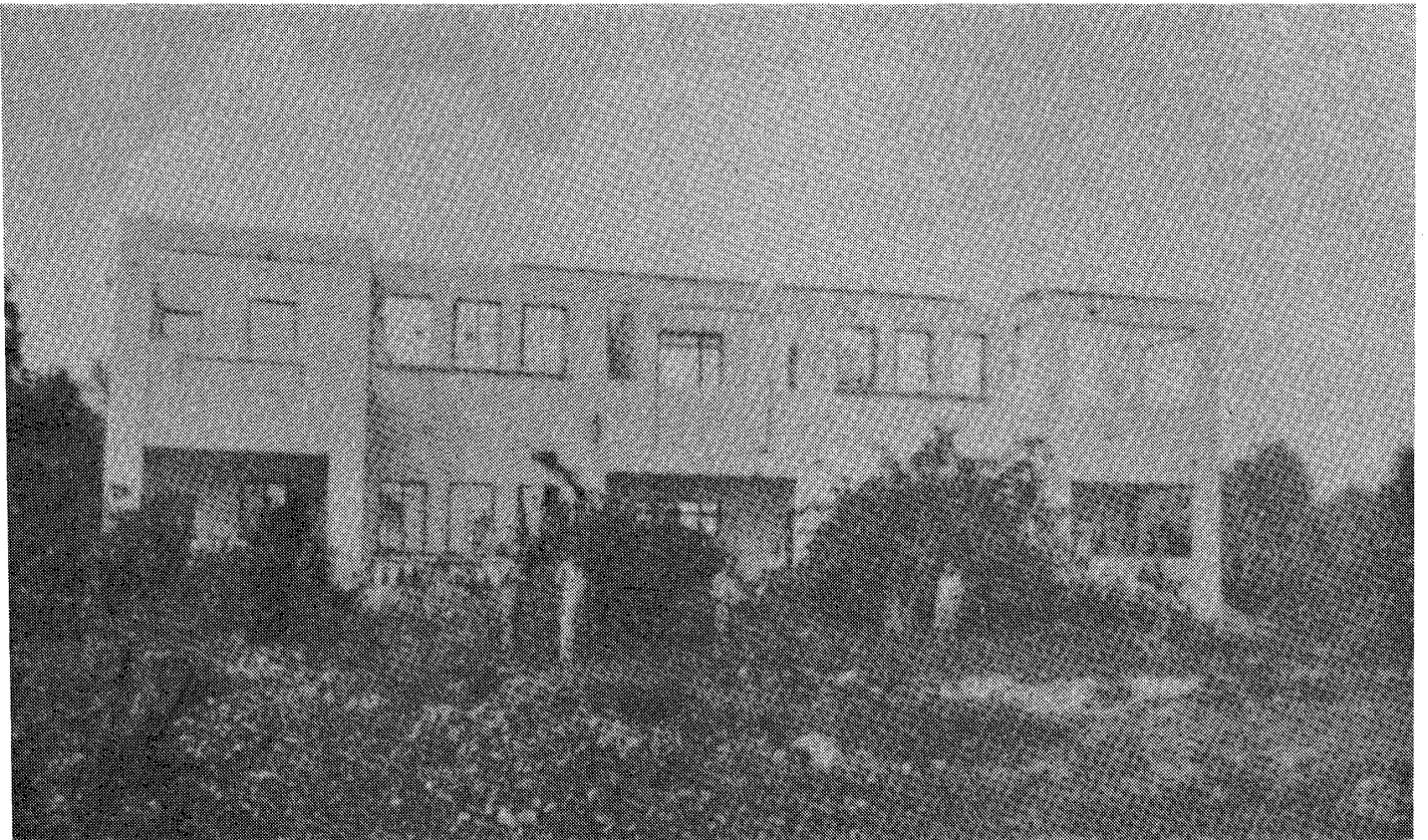
BPCがバナバンを移住させるために、太平洋戦争直前にフィジー諸島の中

にあるランビ島を買収し、バナバン全人口の移住を計画していたことにつ

いても、日本政府は開戦当時すでに情報を得ていたと思われる。日本軍がオー

シャン島占領後バナバンの全人口を、島外に送り出した事実がそのことを反映

しているとは私は推察する。



開戦直後の日本軍の爆撃により、廃墟と化したBPCの主要建物の一つ。

Mid-Pacific Outposts より。

襲った早ばつによる食料不足の問題ではあった。しかし、単に食料欠乏のための対策として人口を減らす措置が必要だったなら、なぜ日本軍の使役あるいは「兵補」として、一六〇人前後を残したばあいに、島の事情に詳しいバナバンを選ばずに、ギルバート・エリス諸島民を選んだか、という疑問にどう答えるべきであろうか。

結局、日本軍はリン鉱石という資源を確保し、それを採掘して日本に供給するという目的をもって、ナウルとオーシャン島を占領したのであるから、オーシャン島の鉱区所有者であるバナバンを追い出しておいた方が、リン鉱石を採掘し日本に供給するうえで、有利だという身勝手な配慮があったのではないか、ということが考えられる。ところで、占領後の日本軍はオーシャン島を防衛するために、どのような施設を建設したのであろうか。私見を述べさせてもらうなら、島の面積や地形からいって、ナウルのばあいのように軍用飛行場の建設が不可能なオーシャン島は、連合軍に対して積極的な打撃を与え得る軍事基地としての役割はもち得ない。したがって、連合軍の上陸作戦に備えての防禦陣を、建設するのが唯一のこの島の日本軍の任務だったといえる。

そこでサー・アルバートの文章(第二十二章「ナウルとオーシャン島の防

備)から、次の引用をしておく。

「ナウルもオーシャン島もその無愛想な防禦しやすい上陸地点、その石灰岩の断崖、無数の洞窟のために天然の要塞といえよう。日本軍は自らの防衛体制をつくるさい、考えられるあらゆる方法で島の構造を利用した。時間がかぎられていたため我々が点検できなかった他の手段も、彼らがその目的のためにとっていたのは疑問の余地がない。

オーシャン島の条件はナウルのばあいと多少違っているが、いかなる上陸攻撃もすべて困難であった。その唯一の砂浜は約二〇〇メートルの長さで、北端がポイントハーバーに接している。島で最も適当な上陸場所であるこの地点には、六インチ海軍砲と機関銃の砲座が、着弾を集中できるように配備されていた。ここから縦射する砲火は致命的だった筈である。

鋼鉄のレールその他リーフに配置された障害物も、やはり入念な規模のものであった。その内側の防禦線としては「電流の通ずる線」のシステムが設けられていた。(ここで三人の原住民が実験的に追いつめられて死亡した話に言及)。

タバアン村からタピワへの北方の一マイル前後の海岸線には、尨大な労働量が投入されたに相違ない。そ

ホーム・ベイを見下ろす日本軍要塞。
六インチ砲が備えられている(上)。

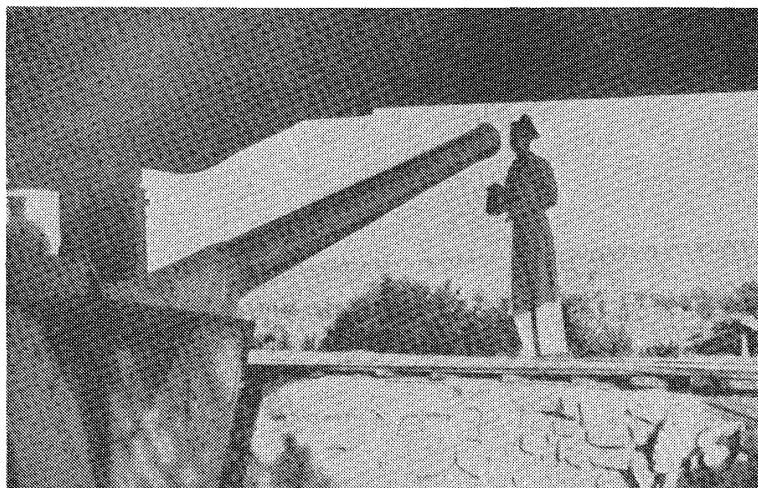
下の写真は内部から撮ったもの。
これも Mid-Pacific Outposts あり。



JAPANESE GUN-SITES AT OCEAN ISLAND.
Three 6-inch naval guns in strategic positions overlooking Hooe Bay.

これは沖合の裾礁の性質を考慮して、ボートやカヌーの揚陸場をつくるために、幅の違う幾つかの間隙をもつ防護壁が、鋭くとがった石灰岩で延々と築かれている、とても表現できるであろう。幅の広い通航路はサンゴの巨大な岩塊で慎重に壁を作り、障害物は支えている壁の上に運びあげられていた。より狭い通航路は木製の柱と有刺鉄線網でブロックされていた。

この長い海岸線は機関銃のトーチカその他の方法で防備され、事実上切れ目のない墨壁の延長線をなして

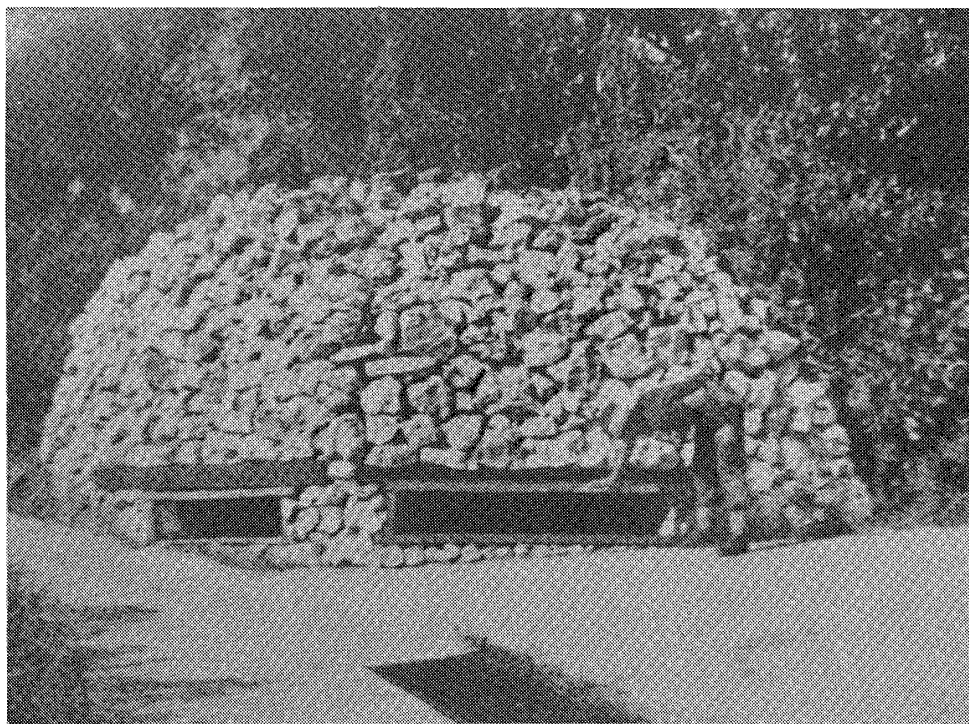


いた。この地区は上陸を企てる集団にとっては、最も困難なところとなったであろう。風景の点からいってオーシャン島のこの部分は、ユニークで美しい岸辺であったのが、完全にスポイルされてしまった。

明らかに防備なしで残された唯一の海岸線の部分は、リーフがとくに荒々しく起伏し、寄せ波がきわめて大きいために、正常な気象条件のもとでも、ボートによる上陸は事実上不可能な、岩礁だらけの東側だけであった。

この記録の中では地雷について余り述べなかった。我々としては敵は両方の島に、念入りに地雷敷設を行っていたと理解していた。オーシャン島を脱出したギルバート島民ナビタリが、その島の地雷原について多くの情報を提供していたので、そのデータは警戒のために非常に有益なことを証明する筈であった。

我々は上陸部隊の将校たちから、日本人は降伏のさい、これらの防禦法についての質問に対して、すべての地雷は撤去済みだときっぱり述べた、という情報をえていた。その情報に正確なことを願うだけであった。両島を視察する肝要な願望が余りにも強かったため、我々は巡視してまわった間、地雷の危険性は余り気にならなかった。



オーシャン島の日本軍トーチカ。原書の説明では、BPCの支配人宅へ通じる道の近くのものとする。

Mid-Pacific Outposts より。

明らかに日本軍は、自分たちの防衛方法に適合したオーシャン島の天然の特色から、ナウルに比べて攻撃を不可能にする可能性が、はるかに大きいと考えていた。そのため、この小さい方の島の守備隊は、わずかに六〇〇人の兵力にすぎなかった。」

以後、オーシャン島は食料の補給も全く不可能な状況におかれた。
ルシア牧師とマヌエラ特務曹長
日本軍占領下のオーシャン島における迫害を、体験しもしくは見聞したうえ、オーシャン島から追放されたルシア牧師とマヌエラ特務曹長から、サー

・アルバートが得た情報が、第十二章と第三十三章で詳述されている。

サー・アルバートはこの二人とは旧知の間柄であったし、ルシア牧師とマヌエラは共にエリス諸島（ツヴァル）北端のナヌメア島出身で、牧師はマヌエラの妻の兄弟だという関係でもある。一九〇五年若き日のサー・アルバートが、ナヌメア島でBPC労働者を募集したとき、応募してきた十四才の少年がマヌエラであった。

オーシャン島でのマヌエラは、サーフボート（沖の輸送船と岸を往復する運搬用小船）の乗組員から、やがてその船長になり、BPCと三回ほど契約を更新した後、ギルバート・エリス植民地保安警察隊に加わり、その特務曹長に昇進したという経歴であった。

ルシア牧師の方は戦前オーシャン島のLMS（ロンドン伝道協会）の責任者で、島民の間に信頼の厚い人物として、サー・アルバートも交際していたのであった。

日本軍が上陸してきて数日後、伝道所内の牧師の家に、日本軍の兵士数名が侵入して無理に箱類や金庫を開けさせ、聖書や聖歌集をなげ出し、教会建設用の募金を奪い去った。牧師はイギリスやアメリカの兵士はそんな乱暴をしない、と日本兵に抗議した。そのため牧師は敵軍のシンパだという理由で逮捕され、監禁されたうえ数日後に処

刑されることが決まった。

ルシア牧師が監禁されて三日後に、オーシャン島に着いた日本船から、上陸した一人の日本人医師が、その日、ルシア牧師が処刑されることを聞いて、住民からその理由を確かめ、理由のない処刑をやめるよう日本軍守備隊司令に申入れた。長い激論の末、医師の主張が勝って、牧師は釈放されたが伝道事業は禁止された。

その後、日本人学校教師が協力した結果、ルシア牧師にはより大幅な自由が認められた。しかし、その後数人の原住民の打首の処刑にさいして、牧師も他の島民全員とともに現場に立ち合うよう命令され、同じ運命になるのを免れたのは幸運と思え、と告げられたという。

その後マヌエラがタラワに送り出されたのに続いて、ルシア牧師も多くのギルバート・エリス諸島民と共に、カロリン諸島のコスラエに送り出された。当時オーシャン島に残された住民の多くは、牧師の安全について強い懸念をもっていた。しかし、一九四五年九月十四日に、サー・アルバートはルシア牧師とサモア人の妻セネマに、オーシャン島で再会することができた。

次にマヌエラ特務曹長が見聞した日本軍の行動を、サー・アルバートが記録した第三十三章からの要約を記録しておこう。それはオーシャン島調査の



マヌエラ特務曹長。
Mid-Pacific Outpostsより。

後でタラワを訪れたサー・アルバートが、マヌエラ特務曹長に再会して、直接に聴取したマヌエラの供述の要約といえる。

マヌエラによれば、上陸してきた日本軍が、国旗の掲揚式を行ったときには、原住民（バナバンとギルバート・エリス諸島民）は、参列することを許されなかったが、約一カ月後に島内の四つの村落で、一種の国民会議が開かれ、日本人の支配の下で原住民は整列させられ、日本の国旗に向かって日本人にならって、三回最敬礼させられたことを、マヌエラはそのやり方を実演してみせた。

サー・アルバートの質問に答えて、二人のタビテウエア島民^(注一)、一人のマイアナ島出身青年^(注二)、四分の一混血青年の四人が、日本軍によって首を切られて処刑された状況を、オーピンググレーブ（公開墓穴）とよんで、両手を背にうづくまる姿勢をとらされるところから、マヌエラが自ら演じてみせた。その処刑の現場にはすべての住民を召集し、残虐な処刑を目撃させるのが日本軍のテロ方式だった、と彼は語った。

この四人が処刑された原因は、少量の米を盗んだことであつた。別のエリス諸島出身者は、日本兵が彼の私物を入れてある箱を、かきまわしているの

を見て、抗議したために銃剣で刺されて重傷を負い、翌日死亡した。さらにマヌエラは「電流の通じているワイヤー」の防禦網に、日本軍は目かくしをした三人の原住民を、追いつめて感電死させたことをもサー・アルバートに話した。

残留していた六人のヨーロッパ人に関するマヌエラの知識は、彼がタラワに送り出された時まで、若い行政官だったイギリス人カートライト氏が、わずかな食料と強制的重労働のため、健康を害して死亡したことだけであつた。他の五人はマヌエラがいた時には生きていたが、いずれも体力は極度に衰弱していたこと、日本軍が何か特殊な「治療」をしていたらしいこと、などがマヌエラの情報であつた。

サー・アルバートは、ナベタリが脱出した当時、オーシャン島に残っていた一六〇人前後の原住民（ギルバート・エリス諸島民）は、どうなつたと思ふかをマヌエラに質問した。サー・アルバートがタラワに到着した当時、その約一六〇人の運命に関する唯一の情報、オーシャン島の日本軍守備隊司令が、サー・アルバートを伴ってオーシャン島に着いたオーストラリア軍の訊問に対して、陳述したものだけであつた。

その陳述の内容は第二十一章に記録されている。

「さらに数名の将校とのインタビューで、日本軍司令は自発的に、原住民たちはリーフで魚をとるために与えられていた爆弾を、いくつもかくして、それで日本人を攻撃する陰謀を進めていたと語った。そのため日本軍は原住民たちをポートハーバー近くの海岸に連れていき、その全員を射殺し遺体は海に投げこんだ、というのである。」

「ギルバート諸島民のことを知っている者なら誰も、完全武装した四倍もの日本軍に対して、攻撃を企てたという供述を信ずることはできない。」

こうした情報を確かめるために、サー・アルバートはマヌエラの考えを求めたわけであつた。マヌエラは全員が殺されたと思うと答えた。日本軍が残留ギルバート・エリス諸島民を他の島に移したのではないか、という可能性は、アメリカ軍哨戒機が一九四三年十二月以後は、毎日飛来していたことを思えばありえなかつた、とマヌエラは答えた。

△注一▽△注二▽ タビテウエア島もマイアナ島も、ギルバート諸島に属する環礁である。

△注三▽ ナベタリの脱出については次の章で述べる。

ナベタリの脱出・漂流

『中部太平洋の前哨点』第二十四章は、「ナベタリのカヌー航海」と題して、ギルバート諸島（今のキリバス）

のニクナウ島出身のナベタリが、一九四四年四月頃に他の六人とともに、三隻のカヌーで出漁したままオーシャン島に帰らず、約二四〇マイル東方のギルバート諸島を目ざして、脱出をはかった漂流航海の顛末を記載している。

ニクナウ島民はアウトリガー・カヌーでの遠洋航海に、伝統的に強い実力をもつといわれるが、アウトリガー・カヌーは本来遠洋航海には不適當な、脆弱な構造のカヌーである。何らかの理由でオーシャン島から引き離される



ナベタリ（左）とウェークフィールド少佐。Mid-Pacific Outpostsより。

と、カヌーは強い赤道海流に押し流されて二度と戻れなくなる。東を目ざしても西に押し流され、ナウル島にでも流れ着かないかぎり、ソロモン諸島まで漂流する結果になり、生き残れるチャンスはほとんどありえない。

ナベタリら七人は幾つかのココナッツ、日本軍の水筒につめた水、それに魚獲物とギジ餌を携行していたが、オーシャン島を離れた翌晩には、三隻のカヌーのうち三人が乗っていた一隻が行方不明になった。残った二隻はその後離れないようロープで結びつけて漂流を続けた。しかし間もなく悪天候のためカヌーの帆が失われた。

食べ物釣った魚、水は雨水が、雨が降らなければサメの血を飲んだ。しかし、何日か後にナベタリと仲間のレ

ウエラは、もう一隻のカヌーを見失ってしまった。さらに一週間ほど後のある夜、眠っていた間にカヌーが顛覆して二人は海に投げ出された。そしてナベタリがカヌーを復元していた間に、身体の衰弱していたレウエラの姿が、見えなくなってしまった。

孤独になったナベタリは風と潮流にカヌーをゆだねて漂流を続けた。彼は二度飛行機を見たが高度が高かったので、布を振ったが気づかなかつたらしかった。また大型船とも二回すれ違った。その一隻はかなり近くて船上の人影も見えたが、ナベタリのカヌーを無視して遠ざかってしまった。

その年の十一月になって、オーシャン島を出てから七カ月かかって、ナベタリはニューギニア北方アドミラルティ諸島最大の島マヌス島に近い、ニゴ島のリーフに漂流した。衰弱しきっていたナベタリは翌日島民に発見され、四日後に一人の医師が到着して、マヌス島のオーストラリア軍病院に送りこまれた。

病院で幾分回復したナベタリは自分の経験を、説明できるようになったので、当局はオーシャン島の日本軍の動向について、ナベタリの貴重な証言を求め、彼は航空機でタラワに送られ、そこで健康を回復した。

ナベタリら七人がオーシャン島脱出を決意した直接の動機は、一九四四年

四月に島にいたギルバート・エリス諸島民——サー・アルバートはこの章では一〇〇人ないし一六〇人と書いている——に対して、日本軍がその人数と同じくらい多くの穴を、掘れと命令したことにあった。彼らはそれらの穴は自分たちの墓穴にされる、とそれまでの墓穴の端での処刑を見た経験から、直感的に考えて恐怖に追いこまれたからであった。

ナベタリの供述によれば、オーシャン島に残されていたギルバート・エリス諸島民のうち、「不思議なことに約一〇〇人は兵隊としても訓練され、彼らには小銃も支給されていた」という。ナベタリの話ではそれらの原住民は、もし連合軍が上陸作戦をしてくるようなことがあれば、彼らは日本軍の方に銃口を向けることができる、という決意をしていたというのである。

タラワではギルバート・エリス諸島植民地行政官のウェークフィールド少佐が、ナベタリを預かって、ナベタリに地図の読み方などを教えた。その結果として、

「日本軍の人数や火力についてはかなりでなく、BPCの建物や工場に関する被害についても情報が得られた。幸いBPCのセツルメントの図面もその時入手できた。そのデータは他の情報源からの詳細な部分と照合された結果、驚くほど正確なこと

が証明された。ナベタリの観察力は非凡なものと考えざるを得ない。」

ナベタリは六人のヨーロッパ人の運命についても、二人は死亡したこと、他の四人についてもその姿が見えなかったので、恐らく死亡したと思われることを話した。

ウェークフィールド少佐はナベタリを、オーシャン島での日本軍降伏式、英国旗掲揚式に立ち合わせるために連れて行った。サー・アルバートはそのさい、ギルバート諸島民流の明るい微笑をする二十六才のナベタリに会った。

カブナレの奇跡的な脱出

「オーシャン島の日本海軍陸戦隊司令鈴木少佐が、約一六〇人のギルバート諸島民とエリス諸島民が、どのように日本軍に向って蜂起し、それに続いた交戦で全員がどのように射殺されたかを、よどみない口調で語ったとき、我々の誰一人としてその言葉を信じなかった。状況がどうであつたにしろ、原住民はそんな圧倒的な優劣の差を無視して、そうした暴挙は決して企てない良識をもっていた筈である。しかし、どのような反論ができようか。彼らは一人残らず死んだのである。そう我々は考えざるを得なかったし、それだけに事態は望みのないものと思えた。」

ところが、驚くべきことに一人だけ脱出者がいて、一部始終を物語るという、『事実小説よりも奇なり』が再現されたのである。」

こんな書き出しで始まる第三十九章「大虐殺・カブナレの脱出」は、一九四五年十二月になってから四カ月近い隠遁生活の後に、姿をあらわしたニクナウ島出身のカブナレが、いかにして日本軍の虐殺を危機一発で免れ、いかにして生きのびたかの物語りである。

この章はサー・アルバートがニュージールランドに帰って、二カ月もたつてからギルバート・エリス諸島植民地行政官ウェークフィールド少佐から、受取った手紙を引用する形で書かれたものである。ここではカブナレが終戦を知らされた時のシーンを、サー・アルバートの文章から引用する順序で記述を進めたい。

「原住民は幾つかの班に分けられ、さきに述べたナベタリの供述と一致して、兵隊として訓練された以外に、それぞれ違った任務を与えられていたらしい。カブナレの班は八名で構成されて漁業をやらされ、毎日昼間と宵のうちは海に出ている。彼らは一人の日本兵の支配下におかれ、時折、海が荒れ天候の悪いために起こったことだが、一匹の魚もとれなかったときには、彼らの顔には日本兵が平手打ちをくわせた。」

平和が戻ったと宣言された日に、原住民は全員オーシャン島の中心施設に集合させられた。一人の日本士官が彼らに戦争は終わったこと、自分たち日本人は間もなく島を去ることを告げた。カブナレの班員は心の中では狂喜したが、原住民はその場では自分たちの感情をあらわすのを恐れた。しかし、敵は原住民について全く別のプログラムをもっていたのだ。」

そのプログラムとカブナレの危機一発の脱出を、ウェークフィールド少佐の手紙によって、説明しよう。

八月十八日頃、カブナレは他の七人と共に、タビアン村から下っていったところにある断崖の上に連れていかれ、両手を背後でしばられ、目かくしをさせられ、互いに寄り添う形で断崖の端にしがませられた。一人の原住民に一人の兵士がついていた。

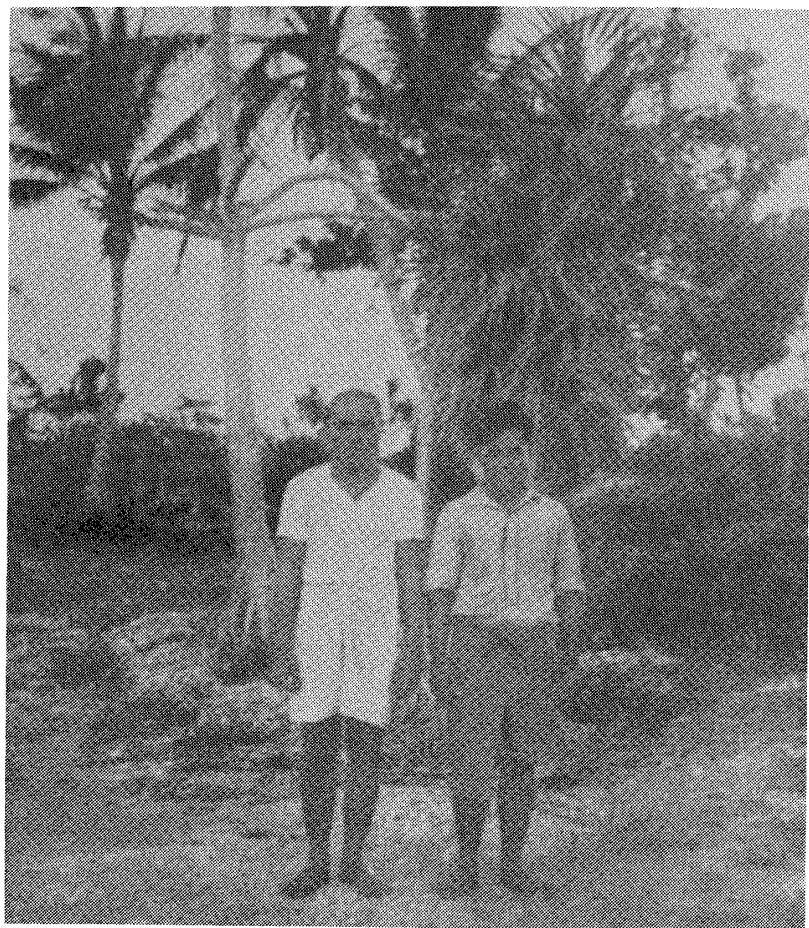
カブナレたちは運を天にまかせざるをえなかった。彼は隣にいたファライリヴァが神の名をとるのを聞いて、それで良い、私は覚悟ができていると声をかけた。次の瞬間カブナレは誰かが刺されたような、強い叫び声をあげるのを聞いた。それと同時にカブナレは断崖から転落した。それは無意識のうちで起こった行爲だったが、そのおかげでカブナレは助かった。断崖は七メートルほどで、下には潮がみちはじめ

ていたが水深は浅かった。

落ちたカブナレは死んだふりをした。断崖の上から何発かの銃声がきこえたが、彼には命中しなかった。両手をしばられ目かくしされたまま、しばらくじっとしていた彼は、日本兵が去ったと信じられるまで待ったが、その間にファライリヴァが波に押されてきた。しかし、すでに死んでいた。カブナレは立ち上って鋭い岩のところへ渡って行き、岩角で両手をしばったロープを切断し、目かくしをはずした。まわりには死んだ男たちが浮かんでいたが、彼は隣接の小さい湾内にある洞穴のくぼみによじのぼって、身をかくした。

一晩中洞穴の中にいたカブナレは、翌日の真昼頃に非常な低空飛行をする飛行機の爆音を聞いた。それは約三〇分も続いた。そのことを後に聞いたウェークフィールド少佐は、それがタラワから飛来して日本兵のために、講和を確認させるリーフレットを投下した連合軍の軍用機であった、ということに思いあたった。

その頃、日本軍は不利となる証拠を一掃するため、何人もの日本兵に海岸ですべての原住民の遺体を集めさせ、ランチで外洋に運んで捨てる作業をしていた。しかし、洞穴内のカブナレはそうした状況を知らず、第二夜とその後の日も終日そこにかくれていた。



カブナレ (左) とナベタリ。
Mid-Pacific Outposts より。

その後ココナッツを求めて、彼は内陸部に夜になって歩いて行き、適当な洞穴を見つけてそこに住みつき、夜はココナッツをとって暮す生活を三カ月も続けた。

カブナレは時々近くの高い木に登って、島の様子を観察したが、深い木の葉のおかげで下からは彼の姿は見えなかった。彼は何隻かの輸送船を見たり、遠くにユニオン・ジャックの旗が掲げられているのを見ても、日本軍のトリックかも知れないと思って、すでに連合軍の支配下にあり、日本軍は降伏し

て撤退していたことに気付いていなかった。

しかし十二月になって、余り遠くない所に止まった一台のトラックに乗っている人々が、ギルバート諸島民だと確認して、木から降りる気になった。そして、二人の原住民がヤシ酒をとるために持っていたビンが、チリンとふれ合う音を聞いて、彼は二人のあとを追いつ、「カム・ナ・マウリ」(挨拶の言葉)と声をかけた。二人は驚いたがすぐに安心した様子で、たたみかけるように質問をあげてきた。

それは一九四五年十二月二日の午後であった。ウェークフィールド少佐の手紙から引用しておこう。

「先週の日曜日(一九四五年十二月二日)の午後、私は数人の兵と共に倉庫の中で仕事をしていた時、普段は物静かな私の前任事務員と通訳とが、駆けこんできた。彼は非常に興奮していて、すぐには口もきけなかった。息をきらせた彼の説明から、私はつい今しがた不審な一人の男が見つかつたので、私のところに連れてくるころなのだ」と了解した。私がさらに事務員に質問するより先に、一人の亡霊が興奮したヤジ馬に囲まれて護送されてきた。」

それがカブナレであった。彼は「完全に剃られた頭と鋭い目付をもち、黄色い肌の色」をしていた。頭髪は自分でガラスの破片で剃つたからであり、皮膚の色は何カ月も洞穴にひそんでいたからであった。両腕を放された彼はしばらく立ちすくんだまま、機敏にまわりを見まわしていたが、やがてギルバート語で熱弁をふるいはじめた。ウェークフィールド少佐は日本軍の残虐行為を、目撃し熟知している唯一人の証人が、奇跡的に生き残っていたことを知った。そしてショックと栄養失調のために、危険な健康状態にあったカブナレを入院させた。数日後、彼は回復して恐ろしい経験の具体的な説

明ばかりでなく、ウェークフィールド少佐を案内して、色々な出来事が演じられた現場を説明することができた。サー・アルバートは次のようにつけ加えている。

「彼の冒険はまだ終わっていない。というのは急いでナウルに連れて行かれ、そこから飛行機でトロキナもしくはラバウルに飛んだ。そこでナウルとオーシャン島から先に着いている他の原住民と合流して、処罰されずには済まされぬ特定の日本兵の残虐行為について、証言する予定だからである。」

おわりに

以上でサー・アルバート・エリスの『中部太平洋の前哨点』によるオーシャン島の日本海軍に関する紹介を終る。しかし、ここで付言しておきたいことは、サー・アルバートが同書で示している、一九四五年十二月十五日に、新しい入植地ランビ島のヌク港に「トリオナ」号から上陸した人数である。それは次のように分類して示されている(二四〇頁)。

男性	一八五	一五二	三三七
女性	二〇〇	九七	二九七
児童	三一八	五一	三六九
バナバン	ギルバート	合	計
	諸島民		

合計 七〇三 三〇〇 一、〇〇三

この人数を見て受ける印象は、オーシャン島を追われて以後の二年半ほどの間に、生まれた子供もいたことは確かであるが、バナバンに関するかぎりは、それほど日本軍に殺されたり、追放されていた島で死亡した人たちは、多くなかったということである。

ここで蛇足ではあるが、サー・アルバートが紹介したルシア牧師とマヌエラ特務曹長が、その後どのような役割を演じたかについて、南太平洋大学の出版物「ツヴァル史」(Tuvalu... a history(1983))によって、ふれておきたい。

サー・アルバートはルシア牧師の綴りを「Pastor Rusia」としていたのに対して、南太平洋大学の出版物は「Pastor Rusia」と綴っているが、同一人物であることは、その夫人がサモア人セネマとして、双方の本に明記されていることから明らかである。

「ツヴァル史」によれば、ルシア牧師は戦後同じオーシャン島で伝道していたが、ツヴァルの教会がサモアの支配下にあり、伝道もサモア語で行われる伝統に対して、次第に批判的な姿勢を強め、一九四七年にツヴァルにいるツヴァル人牧師たちに書面で、すべてのサモア人牧師をサモアに返し、教会の非サモア化を実現しよう、教会の総会に要請すべきだと主張した。

このルシア牧師の運動はすぐには受け入れられなかったが、年と共にその運動の支持者は多くなり、一九五二年に教会の総会もその問題に取組みはじめた。しかし、ルシア牧師が創始した非サモア化の運動が、実現されたのは一九五八年になってからであった。そして独自のツヴァル教会が創設されたのであった。

一方、マヌエラ特務曹長は日本軍によってタラワに送られてから、食料や医薬品の欠乏に悩むツヴァル人たちのリーダーとして、色々な努力をし激励もした。そして一九四三年十一月にアメリカ軍が、タラワを日本軍から解放した後は、マヌエラが指揮者となって「ギルバート・エリス労働部隊」を組織した。アメリカ軍のための建物や飛行場の建設、補給物資の移動などの作業を行って、戦争目的達成を支援し、文民政府の再建に協力した。

この労働部隊は一九四五年八月、日本の降伏によって解散した。しかし、ツヴァル人たちを故郷に送還する輸送船は、同年十二月まで配船されてこなかった。(マヌエラはその後 MBE Member of the British Empire という、一種の勲章を受けた、とサー・アルバートは書いている。)

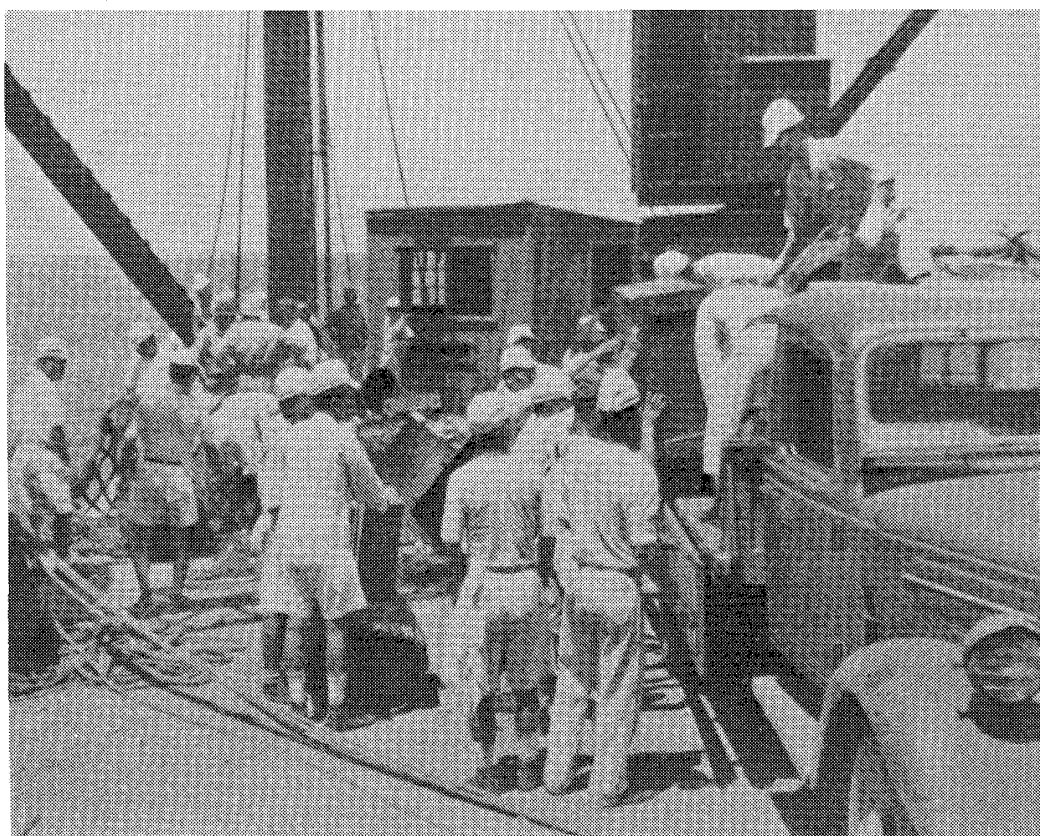
もう一つ蛇足を追加する。それは昭和四十六年九月に、フィジーを現地調査した財団法人高速道路調査会のメン

バーが、恐らく日本人として始めてラソビ島を訪れたことである。昭和四十七年三月に出版されたその『南太平洋地域総合開発調査報告書』には、「ラソビ島の開発計画(フィジーにおけるケース・スタディ)」が、三九―四四頁に収められている。

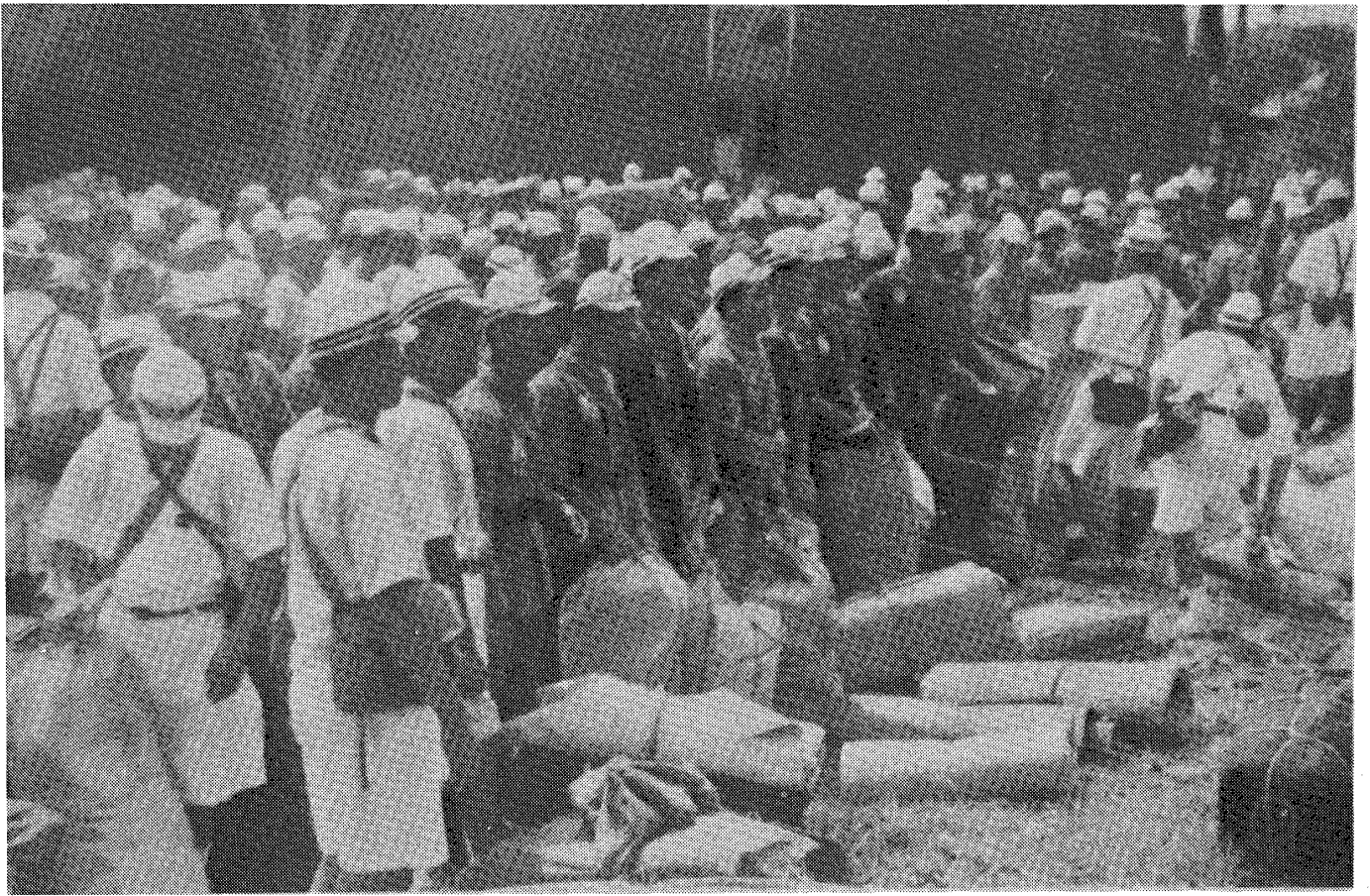
がランビ島に入植するに至った経緯も説明されていて、その説明も日本における最初のものであった。

(注) 『ミッドパシフィック・アウトポスト』に付された降伏文書の全文は、(75)―152 ページに掲載した。

△太平洋学会事務局▽



オーシャン島の港で、オーストラリア軍のための使役に従事する日本兵。
Mid-Pacific Outposts より。



オーシャン島出発前に、オーストラリア軍の所持品検査を受けるために集合している日本軍（上）。ブーゲンヴィル島トロキナの収容

所へ移動するため、オーシャン島を去る日本軍。防波堤の向こう側に日本軍が構築した上陸阻止用の障害物が見える（下）。前掲書より。